

迷中立行 ———迷いの只中に光を求めて———

我妻 忠夫

学校法人成田会理事・評議員 長野救命医療専門学校長

要旨：人生における中心柱となるものは何であるか探究する。その視点を三点に絞り、世界の「真理」とは何か、「生死」の問題、「自己」とは誰か、について考えているところを明らかにする。

キーワード：人生、大疑団、真理「無常」、生死、自己、教育、菩薩道、求道

はじめに

人にはそれぞれ生の拠って立つところがある。その人の生きる土台となり、柱となっているものである。そんなものはないと言っても、それがちゃんとあるから、事実生きているのである。ただ自覚しないだけのことである。今まで何をして生きてきたか、これからどう生きるべきか問う時、それが何であるかを明らかにすることがきわめて大切であることは、誰も否定できない。

「かつてギリシアの哲人ディオゲネスは、白昼提灯をさげて「人間はいないか」と叫んで歩いたとのことである。私たちの人生における最大の課題は、よき人といかに出逢うかということに尽きるのではないであろうか。よき人とは、人生を真実に生き、真実の言葉を語る人である。」
(『定本 清澤満之文集』474頁、解説 安富信哉)

三人の師を仰ぐ。

人生の師、近代の親鸞聖人と例えられた明治の宗教者、清澤満之先生(1)は、『歎異

抄』と『阿含経』と『エピクテタス教訓』とを<我が三部経>として、生の根拠とされた。

修道の師、信州仏教真正大学建設に尽力された元石川・長野師範学校教授、毎田周一

先生(2)は、「無常経」(雑阿含経)と「凡夫経」(十七条憲法第十条)と「愚禿経」(教行信

証 真実信 慚愧表白)を<無常三部経>として、一切の根拠とされた。

哲学・教育学の恩師、元京都大学教授・教育学部長、蜂屋 慶先生(3)は、「技術」と「人間性」と「超越」を<教育三目的>として教育論を展開された。

では、我が迷いの生において、その芯棒になるものは何であるのか。無限の彼方にある微かな光を、教育との関わりを踏まえ乍ら求めてみたい気持ちで一杯である。

我が三大疑団

我が人生における大疑団は、世界の「真理」とは何か、「生死」の問題、「自己」とは誰か、その三点である。大疑団に答え給うものは何であろうか。

<我が三部経>、それは「無常経」(相応部教典 22-15 無常なるもの)と「生死経」(正法眼蔵 生死)と「自己経」(清澤満之 臘扇記の一節)である。

私は、それらによって救われ、支えられ、歩ませていただいていることは、疑いようのない事実である。ここで、その周辺を整理してみたいと思う。

1 第一に、世界の「真理」とは何か問う時、「無常経」を根拠とする。

それは、釈尊の「原始の教え」(南伝、相应部経典『無常なるもの』)(4)である。

「比丘たちよ、色(肉体)は無常である。無常なるものは苦である。苦なるものは無我である。無我なるものは、わが所有(もの)にあらず、わが我(が)にあらず、またわが本体にもあらず。まことに、かくのごとく、正しき智慧をもって観るがよい。

受(感覚)は無常である。・・・・・・

想(表象)は無常である。・・・・・・

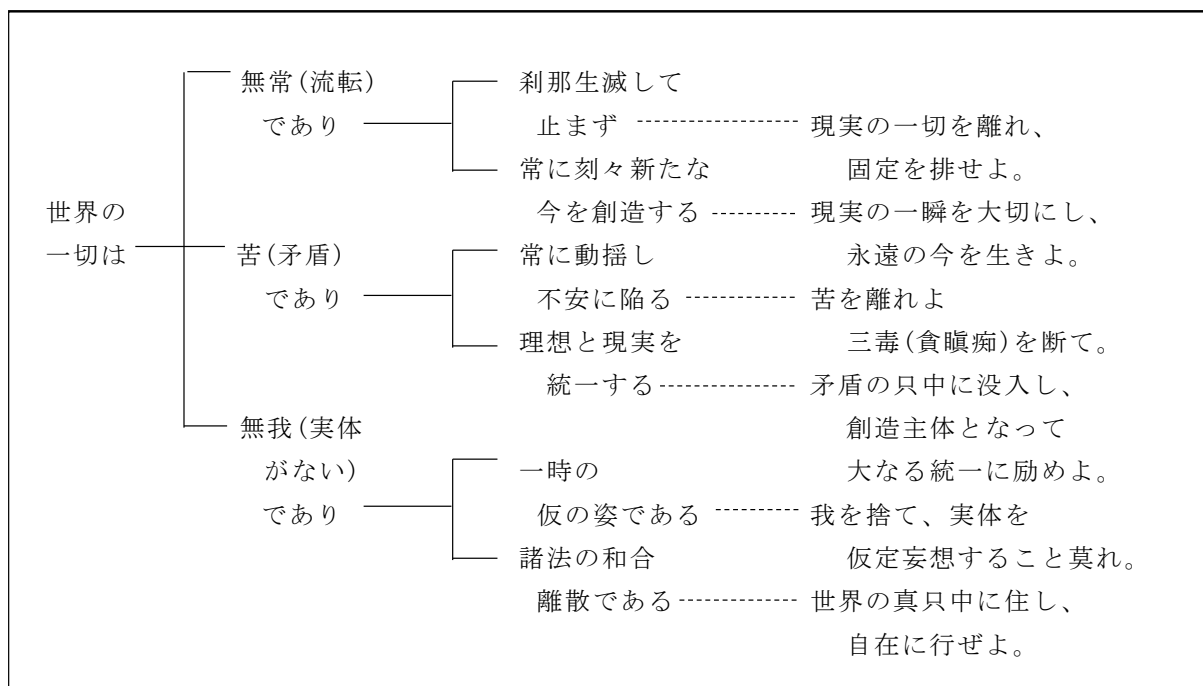
行(意志)は無常である。・・・・・・

識(意識)は無常である。無常なるものは苦である。苦なるものは無我である。無我なるものは、

わが所有(もの)にあらず、わが我(が)にあらず、またわが本体にあらず。まことに、かくのごとく、正しき智慧をもって観るがよい。

比丘たちよ、わたしの教えを聞いた聖なる弟子たちは、そのように観て、識を厭い離れる。厭い離るれば貪欲を離れる。貪欲を離るれば解脱する。解脱すれば、解脱したとの智を生じ、<わが迷いの生はすでに尽きた。清浄の行はすでに成った。作すべきことはすでに弁じた。このうえは、もはや迷いの生を繰返すことはないであろう>と知るのである。」

釈尊の「原始の教え」は、私には以下のように聞こえる。



いつの時代も、世界には紛争が絶えない。宗教、思想・信条また国家・集団など自身の主義・主張を唯一の「真理」として、それに反するものは全て排除し、或いは武力を以って実現しようと錯誤する故である。世界の全ての人々に共通する「真理」とは何であろうかと探求し、共感的に理解乃至承認し合おうとすることが困難な状況にある故である。

一方、人生に在って、日頃接するあらゆる所において、例えば「生きるとは何か」「自己とは誰か」などを指し示す「よいと思う言葉」や「快いと感ずる語句」を寄せ集め繋ぎ合わせて、いかにも「自分の考え」や「自らの思索」によって探究した「真理」であるかのように錯覚しがちである。よく点検吟味すれば、それは先人によって語り尽くされている遺訓であったり、施策の足跡であった

りすることが知られるばかりである。このことは、毎田周一先生もある著作で「自分の独創だと思っていたことが、以前に人から学んだことを忘れていたに過ぎない。これが人間の独創の正体じゃないか。」と、書いておられる。

「真理」は、私たちの理解や分別を遥かに超えたもの、及び得ないものであることを直覚するとともに、あらゆる事実内に内在し、かつ超越している「逆対応」の関係にあることも体験的に直観するところである。

では、世界の「真理」とは何であろうか。

釈尊は導き給う。世界の「真理」即ち、世界と我の在り方については「別図」の関わりがある。それぞれが関わりながら、二方向を持つ。否定性と肯定性の方向である。現実の否定性と肯定性の方向が、常に相即している。これは、色即是空として自性本原に帰する働きと、空即是色の妙有として現前する働きとが、我を場として営為されていると言ってもよい。世界における諸法の合成点と離散点が我だからである。

では、世界及び我の二方向とは、どのような関係によって成るのであるか。現実を見ると、有としての相は<無常・苦・無我>であり、確かに無限に空性を帯びている。それで虚無に陥り、死に恐怖し、生に執着して、悟りを描き求める。空性の中に存在をはっきり根拠づけ、不安から救われようとして、自意識による「底」（生の拠り所）を作った、そこに収まろうとする。しかし、その「底」は、やがて自分で作り上げていた虚構妄想の「底」であったことが自覚される。生の根拠が無残に碎かれるのである。それ故に、また、「底」を作り、悟った、成道した、地獄に堕ちた、救われる道がないなどと、「虚無の穴」を掘る。偽底を作り、それを拠り所とし、それに気づいて打ち破り、また、……無限に続けていくうちに、そこにふっと本来空なることを直観する。だが、空であると論理づけることは、すでに虚偽の「底」であることを自覚する。その先もまた自意識によ

って作り描いた「底」であることに気づき、ただ無限に砕き続けるのみであることを知る。世界における本来空なる否定性の方向は、そのような在り方において在るのである。

一方、空性を呈する世界において、事物及び現象が確かに現前している。それは、どのような在り方において在るかと言えば、空において在るといふより外に言い得ない。それ

については、次のような体験を持っている。虚構妄想の「底」を作った、それにしがみつ

いていたと自覚する、その刹那、本来空なる直観とともに、現実の世界に眼をやると、「底」がないまま現成している一切を見出す。一切が「底」のないまま、ただそれがそれとして在る、その事実がその事実として在る、正に妙有を感じるわけである。妙有として現前する一切を観るのである。世界及び我における、このような二方向は、我が考え認識する以前に、すでに在らしめられる世界、すでに生かされ行わしめられる我の事実を証するものである。世界の真理、それは無常に外ならない。

2 第二に、「生死」の問題に至る時、「生死経」に心を寄せる。

それは、道元禅師の『正法眼蔵 生死』(5)である。

「生死のなかに仏あれば、生死なし。またいはく、生死のなかに仏なければ、生死にまどはず。ここは夾山定山といはれし、ふたりの禅師のことばなり、得道の人のことばなれば、さだめてむなくまうけじ。生死をはなれんとおもはむ人、まさにこのむねをあきらむべし。もし人生死のほかにはとけをもとむれば、ながえをきたにして越にむかひ、おもてをみなみにして北斗をみんとするがごとし、いよいよ生死の因をあつめて、さらに解脱のみちをうしなへり。ただ生死すなはち涅槃とこころえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし、このとき、はじめて生死をはなるる分あり。生

より死にうつるところは、これあやまりなり。生はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり、かるがゆへに仏法のなかには、生すなはち不生といふ。滅もひとときのくらゐにて、またさきありのちあり、これによりて滅すなはち不滅といふ。生といふときには生よりほかにものなく、滅といふときは滅のほかにものなし、かるがゆへに生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひて、つかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ。この生死は、すなはち仏の御いのちなり、これをいとひすてんとすれば、すなはち仏の御いのちをうしなはんとするなり。これにとどまりて、生死に著すれば、これも仏の御いのちをうしなふなり、仏のありさまをとどむるなり。いとふことなく、したふことなき、このとき、はじめて仏のころにいる。ただし心をもてはかることなかれ、ことばをもていふことなかれ、ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、ころをも、つひやさずして、生死をはなれ仏となる、たれの人かころにとどほるべき。仏となるにいとやすきみちあり、もろもろの悪をつくらず、生死に著するころなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづをいとふころなく、ねがふころなくて、心におもふことなくうれふることなき、これを仏となづく、またほかにたづぬることなかれ。」

私たちは、永遠の時間と無限の空間の下において、偶々同じ時代にこの世界に生を賜り、一瞬滞在するだけで、永久にこの世界から消滅する。この生を他者に代わってもらふことも、他者の生を代わって歩むこともできない。そういう背景と在り方を以って今此処にこのようにして存在している。自らの出自の故も本性も、況してや行く末も

何もかも分からないまま生きている事実を自覚する。それが「生きる」実態ではないであろうか。

故に、私たちは「生きる」というよりも「生かされている」乃至「生かされて生きる」存在であるということが真実であると言える。また、生きることに絶えず関心を向け、生かされている不可思議さに跪きながら、同時にその根拠を問う存在でもある。分からないままに生き、生かされながら分からないものを求める存在であるとも言える。

道元禪師は導かれる。「生死すなはち涅槃なり」これが生死の問題解決の鍵である。「生死の中に仏あれば生死なし」「生死の中に仏なければ生死にまどはず」この生死が即真理であり証であれば、それ以外に生死はあり得ない。生死が生死に徹しきれば、生死があることも、生死に惑わされることもあり得ない。「もし人 生死のほかにほとけをもとむれば・・・さらに解脱のみちをうしなへり」である。

「ただ生死すなはち涅槃とこころえて」この生死の一事一事の事実以外に真理はない、生死が即涅槃であり解脱である、只今のこの生死の事実以外に生死を対象としてとらえてはならない、この生死の事実以外に他に真理を求めてはならない、生死は生死になりきるのみである、そんな内容を包含している。それ故に「生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし」である。生にしがみつき、死を厭う心、迷いを嫌い、悟りを願う心を離れ、その心が出で来る本原に帰るのである。「このときはじめて生死をはなる分あり」である。生死を厭い願う理由は、生死の真相を知らないことによる。「生より死にうつるところはこれあやまりなり」「生はひとときのくらゐにて すでにさきありのちあり・・・生すなはち不生といふ」「滅すなはち不滅といふ」のである。生において死を見、死に対して生を考え、生死に前後をつけるのは誤りである。生とは不生の生、滅とは不滅の滅である。常に刻々新たな只今、そこにそうして在るばかりである。新たに生じたの

でもなく、滅したものでもない。その時、その時の仮の姿を現じているのみである。故に、「生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひてつかふべし」である。生の時はただ生の全分を尽くし、死の時はただ死の全分を尽くすのみである。生において死を、死において生を見ようと考えるべきでない。生において死を見ることができないはずがない。死の時はすでに死あるのみであって、死を自覚することができない。ただ生に徹するのみである。「この生死はすなはち仏の御いのちなり」「いとひすてんとすれば・・・仏の御いのちをうしなはんとする」のであり、「生死に著すれば・・・仏の御いのちをうしなふ」のである。生死を「いとふことなく、したふことなき」時、初めて「仏のところにいる」のである。この真相は、心に描き、言語で表現し得るものではない。「わが身をも心をもはなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆく」時、「生死をはなれ仏となる」極致が現ずるのである。我が迷いのまま、我が生死のこのまま、厭わず、願わず、思い描かず、追い求めず、生死を生死のままいただく、真理の働きそのものより行われて従いゆく、絶対随順こそ生死の解脱であり、生死に関する根本解決である。

我が迷いの生、その事実すでに救済されている我れを見るのである。認識の対象としての救済は、救済の事実ではない。今が今である、これがこれである、我が我である、それが真理の現前であり、かつ真理そのものである。真理は、具体的現前において真理であり、具体的現前は、真理そのものの現前であるからである。生死は真理の現前であり、真理は、生死において真理であるからである。この意味で、生死即仏、生死すなわち涅槃である。しかし、実践上、完全に一致することは、身心脱落を要する一大問題である。我が一切が脱落し尽くさない限り、生死即涅槃世界に住することは実現し得ない。身心脱落、脱落身心において、生死がすなわち真理の現成となるのである。真理の現前であり、真理より行われて従いゆく我として、

すでに救われている存在でありながら、かつそれを自覚し正信正行に遊戯し得ない大迷人としての我が、そこに見出されるのみである。真理人でありながら他に真理を立てて期待し、本来人でありながら救済を追い求める、そこに凡夫の根源を見ることが出来る。さらに、凡夫が凡夫であることが、真理であることを知りながら、悟仏を描き対して、それを求める罪愚の深さをも、同時にそこに見るのである。無明のはかり知れぬ底の深さをよくよく思い知らされるのである。

では、真理そのものとなるには、どのようにすればよいのであろうか。

「仏となるにいとやすきみちあり、もろもろの悪をつくらず、生死に著するころなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづをいとふころなく、ねがふころなく、心におもふことなくうれふことなき、これを仏となづく、またほかにたづぬることなかれ。」ここで「生死」の巻は完結するのである。誠に平易な言語を以て、真理の究極を淡々と表現し尽くされているのであるが、その実践を思うと極めて難事である。しかし、そこには精進し志向すべき真理が開き示されているのである。命ある限り、たゆまず、怠らず、向かうべき永遠の目標が定められているのである。「諸悪を作さず」「生死に著する心なく」「上(真理)を敬う」智慧の実践であり、「一切衆生のために憐み深く」「万事を厭う心なく、願う心なく、欲うことなく、憂うることなき」慈悲の実践である。

生死の問題の解決は、生死になりきる事であり、その時、真理が現成するのである。それを目指して「上求菩提 下化衆生」の菩薩の道を励む時、その一步一步が真理現成であり、その一行一息が生死の問題解決である。ここに至って、人生の一切の実践の根源は、菩薩道すなわち「上求菩提 下化衆生」の精進に帰結する。教育もまた例外ではない。児童・生徒・学生(以下「子どもたち」という。)と共に学ぶ者の在り方は、また、菩薩の道でなければならない。菩薩の道を向上修行し、衆生

の救済利益を精進努力する学道は、子どもたちの成長を期し、幸福を願って止まない者の生き方そのものである。

「上求菩提」は自己形成の道であり、自覚の道、智慧の道である。その極致を「正法眼蔵 八大人覺」に求めることができる。「下化衆生」は自未得度先度他の実践であり、子どもたちの成長と幸福を実現する道であり、慈悲の道である。その究極を「正法眼蔵 菩提薩埵四摂法」に求めることができる。永劫の時の流れと、無限広大な空間の只中で、停まることなく営為されゆく大宇宙生命の展開において、只今、この一点に、子どもたちと共にある、共に生きる、共に学び合う・・・ただただ感謝しなければいけない。我が解脱は、子どもたちをして自未得度先度他の心を発せしむることである。我が迷いの生からの解脱のみを考えても、それは迷いを深めるのみである。我が迷いの解脱とは、修行した結果として得るものではなく、子どもたちの成長と幸福を願って、身命を惜しまず行ずる一步一步に実現しているのである。不惜身命を忘れ、我が解脱のみを念ずる時、それが総崩れとなるのである。自我の要求を実現しようとするところに解脱なく、自己を忘るる時、すでに解脱である。自我が滅する時、子どもたちとの活動のみとなる。世界の創造活動のみとなる。その時、小我を離れ、大我を生きるのである。大慈大悲のひとり働くの時、我が智慧成就である。慈悲を尽くす努力の只中に智慧が輝いているのである。

积尊は説かれた。

「如来已離 三界火宅 寂然閑居 安処林野」
(妙法蓮華經 比喻品)

「如来はすでに三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安処す」と。

衆生界を離れて、しかも寂然閑居として衆生界に安らかに処せられるのである。超越かつ内在せられるのである。子どもたちを已離し、子どもたちの只中に安処し、共に慈悲を行ずることが智慧

の道である。大慈大悲が真人の智慧の道であり、教育の原点である。同じ道を行く一人として、自ら学び、自ら修め、自ら高まっていくことが、学習であり教育である。子どもたちの中に没入し、共に人の道を行ずること、即ち、智慧を修め行ずることが慈悲の道である。真摯なる修智慧の後ろ姿に真正なる慈悲が輝くのである。

子どもたちの成長が我が喜びである。子どもたちの喜びが我が解脱である。子どもたちの安心が我が救済である。そこに、我が生死の問題のすべてがある。秋の蒼い天空に澄み切った孤高なる月が、美しい光を以て、静かに家々の戸口を訪れるように、子どもたちの前に立ちたい。

3 第三に、「自己」とは何かを問う時、「自己経」を立脚点とする。

それは、清澤満之先生の『臘扇記』(明治31年より32年にわたる、36,37歳の日記)中、明治32年2月25日付の日記の一節である。(6)

「何物かこれ自己なるや。

ああ、何物かこれ自己なるや。

曰く、天道を知るの心、これ自己なり。

天道を知るの心を知るの心、これ自己なり。

天道と自己の関係を知見して、

自家充足を知るの心、これ自己なり。

自家充足を知りて、天命に順じ、

天恩に報ずるの心、これ自己なり。

自家充足を知りて、

(物を求めず、人と争わず) 天命に順じ、

天恩を報ずる(故に身労心労を厭わず)の心、

これ自己なり。

自己、豈、外物他人に追従すべきものならんや。

自己を知るものは、

勇猛精進、独立自由(人界の独立なり。天道へ対して独立なるにあらず)の

大義を発揚すべきなり。」

自己とは何か。これは、なかなか難しい問題である。誰もが生涯探し求め続ける問題であると言

ってよい。自己でありながら、自己を求める存在が人(凡夫)であるということである。この意味で、自己の探求が人生である。真自己を直観し、そこに跪く時、人は、初めて真正なる生を歩む。

自分の体を自分と思う。しかし、それは自分の体であって、自己ではない。また、自分の体という時、その体は自分の意念によって、思い描いた体であって、体そのものでもない。では、そこに働く意念は自己であるか。それは、自分の思いであり、自分の考えであって、自己ではない。

清澤満之先生は、次のように自問される。「居家も外物なり。衣食も外物なり。乃至身体髪膚もまた外物なり。妄念妄想も外物なり。しからば何物かこれ自己なるや。」

そこで示されたのが、前掲の一節である。認識の対象として固定され、描かれ、説明されたる自己は、真実自己ではないのである。真実自己は、かえって、そこに働く活動そのものである。認識の働きそのものであり、物心を分け、身心を分かち已然の一如なる活動そのものである。認識の対象とならない自己そのものをどのように説明することができるのであるか。清澤満之先生の教えは、その世界から発せられている。

自己とは、「天道を知るの心」である。不可説、不可思議なる自己の世界を、天道(大地自然の法)と言わずして、どのように表現し得るだろうか。それは、真理と置き換えてもよい。自己とは、真理を知る心、即ち、真理の直観であると言われるのである。「天道を知るの心を知るの心」——真理の直観の自覚である。「自家充足を知るの心」——真理の前に跪くのである。無我である。「自家充足を知りて、天命に順じ、天恩に報ずるの心」——無我となって、真理の働きに順じ、真理となって行ずるのである。誠に大いなる自己である。

このような自己は、「外物他人に追従」することなく、「勇猛精進、独立自由の大義を発揚」するはずである。また、「外物他人の為に傷害せらるる」ことなく、「傷害せらるるべしと憂慮するは、妄念妄想」であるから、「退治」しなければならない。そして、「他人もまた外物他人の為に傷害せらるること」があってはならない。「故に、吾人は自らに対する他人のなせる罵詈(ぼり)、膽謗(たんぼう)、毀誉(きよ)、褒貶(ほうへん)に頓着せざると共に、他人に対して無効なる悪口陵辱を加うべからざるなり。吾人は他人に追従迎合せざると同時に、他人を評驚罵謗(ひょうしつばぼう)せざるべきなり。」——我も自己であり、他人も自己である。それぞれが独立自由である。他人に追従し、他人を陵辱してはならぬとともに、他人の罵詈雑言に心動かされてはならない。

おわりに

以上、「迷中又迷」——迷いの中でさらに迷う我が日々において、無明の無底さに身を戦かせながら、無限の彼方に微かな光を見出した。それは、無限の彼方ではあるが、しかし、暗黒の世界なるがゆえに、その微かな光はやさしく、かつ確かな道標となっている。

「道は無窮なり。」(正法眼蔵随聞記 道元・懐奘)——無窮を道という。「求道すでに道である。」(農民芸術概論 宮澤賢治)——求道を道という。確固としてとらえたと思う道は、真の道ではない。それは、迷妄の道であり、執着の道である。道は、「無窮」であり、「求道」である。

初めての人生を、初めて歩む我である。迷いの只中に光を求めて、初々しく、ただ初々しく、一生懸命歩みたい。

(完)

註

- (1)清澤満之(1863~1903) 名古屋黒門町に生まれる。東京大学哲学科卒業。親鸞聖人の仏教に因縁を結び、宗門の発展に貢献した仏教者。明治時代の日本仏教の革新者であり、仏教の再評

価者である。著書に『絶対他力の大道』『宗教哲学骸骨』『我が信念』『清澤満之全集』等多数

「余の三部経」・・・『定本 清澤満之文集』松原祐善・寺川俊昭編

昭和 54 年 法蔵館 449・478 頁

(2)毎田周一(1906～1967) 金沢市に生まれる。京都帝国大学哲学科卒業。暁烏 敏師に師事。石川・長野師範学校教授を歴任。講演・著作活動に専念。著書に『釈尊にまのあたり』『無条件の救済』『正法眼蔵新抄』『歎異抄(口語訳・解説)』『毎田周一全集』等多数

「無常三部経」・・・『解放の宣言』毎田周一撰輯 第 10 輯

昭和 39 年 一周会 4 頁

(3)蜂屋 慶(1920～1997) 大阪に生まれる。京都帝国大学文学部(教育学)卒業。木村素衛師に学ぶ。京都大学教授・教育学部長、光華女子大学学長など歴任。専門は教育人間学・教育哲学。著書に『教育と超越』『集団指導と教育愛』『子どもらが道徳を創る』『学級集団理解の実践』等多数

「教育の目的」・・・『生活指導における集団指導の基礎理論』蜂屋 慶著

1983 年 明治図書 33・194 頁

①その社会に既にある技術(アート)を習得させる。

②子どもの中にある創造性・協力性・学習性を育てる。

③子どもをして超越の世界に触れさせる。

(4) 南伝、相応部経典『無常なるもの』

『根本仏教 阿含経典』増谷文雄著 1980 年 筑摩書房 106 頁

(5) 『正法眼蔵 生死』

『正法眼蔵 生死を味わう』内山興正著 1978 年 柏樹社 9 頁

(6) 『臘扇記』

『定本 清澤満之文集』松原祐善・寺川俊昭編 昭和 54 年 法蔵館 423 頁

文献

1 『道元禅師全集』大久保道舟編 昭和 44 年 筑摩書房

2 『正法眼蔵 啓迪』下巻 西有穆山禅師提唱 昭和 55 年 大法輪郭

3 『毎田周一全集』第 3 巻 昭和 44 年 毎田周一全集刊行会

第 4 巻 昭和 45 年 毎田周一全集刊行会

4 『雑阿含無常経讃仰』毎田周一著 昭和 22 年 中山書房

5 『澄む月のひかりに スッタ・ニパータ』毎田周一著 昭和 39 年 中山書房

6 『定本 清澤満之文集』松原祐善・寺川俊昭編 昭和 54 年 法蔵館

7 『教行信証 坂東本訓読』毎田周一著 昭和 41 年 中山書房

8 『根本仏教 阿含経典講義』増谷文雄著 1980 年 筑摩書房

9 『随筆集 風のころも』西谷啓治著 昭和 55 年 新潮社

10 『生活指導における集団指導の基礎理論』蜂屋 慶著 1983 年 明治図書

11 『教育と超越』蜂屋 慶編 1983 年 玉川大学出版部

12 『歎異抄(口語訳・解説)』毎田周一訳 昭和 35 年 海雲洞

受理日：2020 年 3 月 17 日